廣瀬川

第87号
平成27年
8月20日

仙台市小学校長会

発行者／古澤　康夫（会長）　責任者／丹治　重廣（広報部長）

主張

学校力の向上を目指して

会長　古澤　康夫（上杉山通小学校）

この夏も市内の全小中学生一人一人が復興の思いや願いを込めて作り上げた８万羽余りの折鶴が仙台七夕の見物客でにぎわうアーケードに飾られた。多くの方々が足を止め，飾りを見上げ復興への思いを同じにすることができた。

あの東日本大震災から４年半が経過しようとしている。市内の学校状況を見ると，この４月に小学校２校が仮設校舎から新しい校舎に移ったが，今なお他の学校の施設を借りての学校生活を余儀なくされている子どもたちが数多くいる。また子どもたちの学習指導や心のケアに，精根を尽くし，頑張っている教職員もたくさんいる。私たちは，教育に携わるものとして，「復興は教育の力で」を合い言葉に，子どもたちの明るい未来を信じて，一日も早い創造ある復興に向けて，力を合わせていかなければならない。

今年３月に本市で開催された国連防災世界会議パブリックフォーラムでは，新たな防災教育「3•11～未来へ」のテーマのもと，「新たな防災教育モデル校」を中心としたこれまでの取組，防災学習の公開授業，復興プロジェクトの取組など震災以降，本市で取り組んでいる新しい防災教育について国内外に発信した。また今年度から32年度までの６年間で，市内すべての小中学校が新たな防災教育研究推進取組発表校になり，具体的な実践を進めていく予定である。土砂災害や火山の噴火等自然災害が多発している今日，震災を風化させることなく，一人一人の子どもに自助，共助の力を育む防災教育に各学校でしっかりと取り組んでいかなければならない。

国の動向を見てみると，道徳，英語の教科化やアクティブ・ラーニング，チーム学校など新たな教育改革の波が矢継ぎ早に押し寄せる。本市にあっても，先に述べた新たな防災教育，学力向上や体力の向上（元気アップ仙台っ子事業），今年度から小学校全校で実施となるスチューデントシティ事業への取組など課題が山積みである。

このような状況の中，校長は学校のリーダーとして，学校の目指すべき方向をしっかりと教職員に示し，全職員が方向を一にし，学校力を高めていかなければならない。目の前にいる子どもたちに何を身に付けさせるべきか，子どもの実態を的確に捉え，何をどのように進めていけば良いのか，具体で示していかなければならない。

言い尽くされた言葉ではあるが，不易とは何か，今，やらなければならないことは何かをしっかりと見極め，示していくことが求められる。そのためには，校長自らが日々研鑽を積み，アンテナを高くし，高い先見性を持ちながら学校経営にあたっていく必要がある。

内　容

○主　　張 …… 1
○特集「第3回 国連防災世界会議パブリック･フォーラム」… 2
○提言「復興に向けた創意ある教育」…… 6
○学区紹介「地域とともに」…… 8
○新任校長所感 …… 10
○編集後記 …… 16

特集　第3回　国連防災世界会議　パブリックフォーラム

新たな防災教育「3・11から未来へ」

～各学校における防災学習及び故郷復興プロジェクトの取組～

●と　き　平成27年3月17日（火）　●ところ　仙台市民会館　大ホール

平成27年３月14日（土）から18日（水）に，仙台市において第３回国連防災世界会議が開催された。市内各会場では，世界の防災展，シンポジウム，ワークショップなどが行われた。

３月17日（火）は仙台市民会館において，教育局主催のパブリックフォーラムが開催された。第１部ではポスターセッションが行われ，小学校・中学校・高等学校の復興に向けた取組が紹介された。第２部のフォーラムでは，各学校における防災学習及び故郷復興プロジェクトの取組が発表された。

＜第１部（10：30～12：30）＞

【ポスターセッション開会式】

挨拶（今野　和賀子　仙台市教育センター所長）

○児童生徒の交流

・阪神淡路大震災から20年の節目の年，東日本大震災の被災地の一つである仙台で，仙台市の小中学生が発表者として来仙した神戸市立神港高等学校の生徒と一緒にフォーラムに参加することには大きな意味がある。

○取組の発信

・発表者は，防災学習や故郷復興プロジェクトの取組を分かっていただこうと頑張ってきた。

○今後に生かす

・自然の恵みと脅威にどう向き合うか，これまでの復興の歩みや防災学習で分かったことを受け，どう行動していったらいいのか，再発見の機会にしてほしい。

・このフォーラムを通して，多くの発見や気付きがあることを願っている。

【ポスターセッション】

１　仙台市立岡田小学校児童の発表

⑴　３.11東日本大震災の被災の状況

岡田小学校は海岸から約2.5kmの位置にあり，建物の被害の他に津波が校庭に到達。電気やガス等ライフラインの停止，多くの人々が学校に避難した。その後，避難所の生活が始まったが，児童は，いかに普通の生活がありがたいかを痛感したという。

⑵　防災学習の取組

６年児童が以下の３点の取組を発表した。

①「命を守る防災カードの作成」

自分の命を守るためにあらかじめ避難場所や，家族の集合場所を話し合い，掲示しておくためのもの

②「復興ルームの活用」

震災を風化させないことや他県からの支援に感謝の意を表すもの

③「地域との防災訓練の実施」

これまでの避難訓練よりも一層自分の命を大事にしながら，地域に対して自分が何をできるか考えたもの

⑶　復興プロジェクトの取組

ここでは震災時，またその後の大変な生活を踏まえ，あたりまえの生活がいかにありがたいかを実感しつつ，自分たちに何ができるか考えたものである。特に，故郷復興サミットや４小中合同防災サミットによる話し合いの他に，あいさつ，清掃，花づくり等，日常の活動により，地域への貢献が大事であると報告した。

２　仙台市立東六番丁小学校児童の発表

⑴　３.11東日本大震災の被災の状況

仙台市立東六番丁小学校には，地震後1,800人を超える避難者があった。この避難所の運営のために学校職員はもとより，地域の方々や学生ボランティアの活動する姿を見て，児童は「人のため」「まちのために」活

動しているのはなぜか，地域とのつながりについて学習したいと考えた。

⑵　防災学習の取組

６年児童が各学年の取組を紹介した。

《低学年テーマ》

「地域への安心感・自分の命を守る」：生活科

○保育園や町探検から地域とのつながりを学んだ。

《中学年テーマ》

「地域を知る・つながりを深める」：総合的な学習の時間

○地域の名人や地域の文化遺産の学び，地域を愛する態度を学んだ。

《高学年テーマ》

「地域を愛する・自分にできること」：総合的な学習の時間

○伝統文化や働くことの大切さを地域の先人の姿を通して学習した。

※各学年の学びを通し，自分の命は自分だけで守るだけでなく，地域の方々とのつながりで命を守るのだとまとめた。

⑶　故郷復興プロジェクトの取組

ここでは「笑顔で地域の方を元気にしよう」という合い言葉で，「清掃活動」「あいさつ運動」「ランドセルメッセージ」を発表した。「ランドセルメッセージ」とは，地域を「元気づけること」「伝えていくこと」をポスターにし，ランドセルに添付して登校することである。児童は，あの震災のことを伝えていくことが仙台に住む私たちの務めだとした。

３　仙台市立七郷中学校・将監中学校の発表

英語での説明を交えながら，各学校の生徒会を中心とした故郷復興プロジェクトの取組を発表した。震災で地域の方々との触れ合いの大切さ，ご近所づきあいの大切さを感じ，そのために中学生としてできること，小学校や地域と一緒にできることなどを考えた実践の発表であった。

４　神戸市立神港高等学校の取組

はじめに，阪神淡路大震災を経験した神戸市の防災教育の方針について先生から説明があった。それは，サポーターとしての防災教育，つまり災害時に最初のサポーターは被災者であり，被害を受けた人がどういうサポートができるか，また，災害地から離れた場でどんなことができるかという視点で防災教育を考えてきたということであった。

その後，サポーターとしての防災教育の視点で生徒会を中心に「東北支援継続中」として，東日本大震災後続けてきた活動について発表があった。それは，生徒の作品として作ってきた商品の売上金を東北の６つの高等学校に送っているというものであった。

＜取扱商品＞

2011年　防災ソング「あの日それから」

2012年　カレンダー「無限日めくり」

2013年　キャンドル「継想の灯」

2014年　キーホルダー「あしたのつばさ」

2015年　防災かるた「こどもぼうさいかるた」

最後に，先生から「こべっこマップ」の取組について話があった。小学生と高校生が一緒になって通学路を回り，危ないところをマップに高校生が反映させるというものであった。

それぞれの学校での熱心な取組の発表のあと，会場から質問や感想などもあり，ポスターセッション開会式の中で仙台市教育センター所長の話にあったとおり，発表者にも参加者にも新たな発見や気付きがある充実したポスターセッションとなった。

＜ポスターセッション発表校の立場から＞

仙台市立岡田小学校の実践

（髙橋　淳　現仙台市立北仙台小学校長）

１　はじめに

岡田地区は，大震災による津波で甚大な被害を受け，全壊・流出した家屋も多い。学区内の一部は，災害危険区域になっており，現在でも仮設住宅や学区外から通学している児童がいる。本校では，被災した児童の心のケアを進めるとともに，平成24年度から「新たな学校防災教育モデル校」として指定を受け，近隣の４小中学校と連携して防災教育に取り組んできた。

２　発表について

６年生は，総合的な学習の時間において，年間テーマ「ふるさとの未来について考えよう」を掲

げ，被災した故郷（岡田）の復興に向けて自分たちができることを考える活動を行っている。特に今年度は,国連防災世界会議開催に合わせ,「防災」「復興」の二つのテーマに絞って,学習活動を行ってきた。今回のポスターセッションは，その学習のまとめに関する発表である。

まず「防災」については,「わが家の防災カード」「復興ルームの活用」「学校地域合同防災訓練」について発表した。特に，復興ルームの整備と活用にあたっては，震災の記憶と支援への感謝のための部屋とすることだけでなく，普段の防災学習の場としての活用を目指している。

次に「復興」については,「故郷復興プロジェクト」の一環として取り組んでいる「あいさつ運動」「地域清掃活動」「フラワープロジェクト」について発表した。その他に「４小中学校合同防災サミット」「地域に開かれた学校行事や児童会行事等」についても発表した。本校の子どもたちは，自分たちが明るく元気に活動する姿を地域の方々に見てもらうことこそが，津波で被災した地域を元気にするためにできることであると考え学校生活を送っている。

３　発表を終えて

大震災から４年が経過し，岡田地区も復興が進みつつある。今回の発表を通し，子どもたちは，改めて地域の良さを再発見するとともに，これまでの支援への感謝の気持ちを忘れず，地域の復興に向け自分たちができることは何かを確認し，決意を新たにすることができたようである。

＜第２部（13：00～16：00）＞

１　オープニング

復興ソング「希望の道」合唱

仙台市立木町通小学校

２　開会挨拶　（永広　昌之　教育委員長）

○平成27年度は仙台市震災復興計画の最終年度にあたる。いまだに仮設の校舎や別の学校の教室を借りて授業を受けている児童がおり，児童の心のケアが重要な課題となる。

○仙台市教育委員会では，災害時の自助・共助の力を育み，未来の社会の担い手となる児童を育てるために17校のモデル校を指定し先進的な実践をしている。また，仙台市立七郷小学校は，文部科学省からの研究開発の指定を受け，防災教育に取り組んでいる。

○今後も，新防災教育副読本「３.11から未来へ」を活用し，防災教育を推進するとともに，その取組と復興を，御支援をいただいている全国に，そしてこの国連防災世界会議を通して世界に発信していくことが務めと考える。

○本日のフォーラムにより，学校・地域・家庭の連携が深まり，学校防災教育が更に充実することを期待している。

３　概要説明　仙台市教育委員会

⑴　新たな防災教育について（教育指導課）

①目標「自助・共助の力を育む」

各教科，道徳，総合的な学習の時間，特別活動など，日常の教育活動で指導する。そのためにも年間指導計画に位置付ける。

②防災教育副読本の活用

小学校下学年・上学年・中学校用の３分冊を作成し，内容の充実と活用の促進を図る。

⑵　故郷復興プロジェクトについて(教育相談課)

①児童・生徒によるこれまでの活動

地域清掃活動，あいさつ運動，応援旗の作成，メッセージポスターの作成,復興ソングの制定，モザイクアートの掲示，七夕祭りの折り鶴の作成と展示

②今後の活動の４つの柱

「語り継ぐ」　風化させない取組

「学ぶ」　防災教育（自助・共助）

「感謝する」　地域の方々への恩返し

「深める」　関わった人々の絆を深める

４　公開授業　総合的な学習の時間

「共に生きよう名取川」

仙台市立西中田小学校　５年３組

授業者　髙橋　奈緒　教諭

＊Ｔ：指導者の投げかけ

＊Ｃ：児童の考え

Ｔ　これからできることを考えよう。(課題)

Ｃ　語り継ぐ・学んだことを伝えていく。

C 「命の大切さ」「閖上の人達の思い」「多くの応援をもらったこと」「復興してきていること」「災害に備えること」

T これからできることを２分間相談しよう。

C 「災害の歴史を学ぶ」「閖上の子を受け入れる」「被災地を思うこと」

T 先生は,震災時の新聞を今でも持っています。その後１年間分も持っています。でもその後は記録保管しませんでした。

T １回だけすればいいですか？続けるためにはどうしたらいいですか？

C 「忘れないようにする」「人に伝える」「語り継いでいく」

T 閖上の皆さんは，何が怖いって言っていたでしょう？

C 忘れられることが怖い。

T これから実際に実践していきましょう。
今日は，よく頑張りましたね。

5 児童生徒発表

⑴ 「ふるさと荒浜から学ぶこれからの防災」
仙台市立荒浜小学校

①震災時の様子と，その後の生活（映像）

②取組の紹介

２年生　非常持ち出し袋の取組
３年生　荒浜カルタ作り（地域を知る）
４年生　あったらいいなこんな公園
５年生　復興に向けて自分ができること
６年生　これからの荒浜の防災を考える

⑵ 「故郷復興プロジェクトの取組」
仙台市立高砂中学校

①震災時の様子と，その後の生活（映像）

②震災当時の体験作文の紹介

③被災を乗り越え前に向かう活動
合唱コンクール，運動会，文化祭，他
外国からのたくさんの支援

④故郷復興プロジェクト
「地域連携」「防災学習」「交流・貢献」

⑤独自の活動
「各地中学校との交流」「地域貢献活動」
「小中連携活動」（小中４校防災サミット）

⑥小中４校共同宣言（中学校区小中学校）

6 閉会挨拶 （上田　昌孝　教育長）

○たくさんの方々に参加していただき，大変有意義なものとなった。午前中のポスターセッションでは，阪神淡路大震災を体験した神戸市立神港高等学校も発表され，今後の防災教育を考える上で大変有益な内容を御提起いただいた。

○荒浜小学校の取組は，震災の経験を生かし，これからの防災の在り方を提言する説得力のある内容であった。

○高砂中学校の取組もまた，体験に裏付けられた反省を基に，地域のことを考え命を守ろうとする力強い提言であった。

○西中田小学校の公開授業は，自分たちの地域を理解し，現地を歩き，人との触れ合いを通して，今後の防災・減災を真剣に考える姿勢がうかがわれ，大変頼もしく感じた。日本はもとより，世界へ発信したということに大変意義のある内容であった。

○今後も，家庭，地域との連携を深め，課題を解決していくとともに，新防災教育副読本の改訂や,新たな防災教育を全国に発信していきたい。

7 エンディング

復興ソング「仲間とともに」合唱
仙台市立上杉山中学校

提言
復興に向けた創意ある教育

地域との合同防災訓練３年目を迎えて

１地区会長　武田　洋（太白小学校）

平成25年の４月から太白小学校長として着任した私の大事な仕事の一つとして，防災教育があった。

平成23年３月11日に起きた東日本大震災，そしてその後の避難所開設や避難所運営を踏まえ，地域の方々との連携を進めていく事業として，太白区役所や市役所の担当課，太白消防署，日本赤十字，太白地域町内会連合会，太白小学校，太白小学校父母教師会が顔を合わせての合同防災訓練を初めて実施する年であった。

新防災教育副読本を基に，各学年の防災教育を計画実施する一方，初の合同防災訓練実施に向けて５回の事前打ち合わせを行って，平成25年10月19日（土）に実施した。当日は授業参観も行い，各学年で防災教育に係る授業を行い，参観終了後に地域の方々と合流して，合同で防災訓練を行った。

この合同防災訓練では，以前から防災訓練を実施してきた地域の皆様の訓練内容と，学校で計画した児童の学年に応じた訓練内容とのすり合わせが不十分であったため，児童と地域の方々が同じ訓練をする場面でも，別々に行うことになってしまった。

その反省を踏まえ，26年度の防災訓練では，子どもと地域の方々が同じ訓練をする場面は一緒に活動するよう工夫した。

本年度は，児童と地域の方々が一緒に行う訓練内容と訓練時間のすり合わせを更に進め，充実させたいと考えている。

一つ大きな課題は，中学校との連携である。先の大震災で中学生の活躍がたくさん報告されている。中学生に地域の一員として活躍してもらうとともに，その姿を小学生に見せることにより，一層訓練に対する児童の意欲を喚起させたい。しかし，本校の進学先は２校あり，その２中学校区にたくさんの連合町内会があり，調整が難しいところである。合同防災訓練に対する関係小中５校や各町内会連合会の温度差もあり，時間はかかるが，少しずつ実現に向けて課題を解決していき，本来避難する避難所に小中学生や地域の方々がそれぞれ避難して防災訓練を行うことを目指していきたいと思っている。

提言
復興に向けた創意ある教育

たくましく生きる力を育む　その２

３地区会長　及川　節郎（寺岡小学校）

今年１月発行の「廣瀬川」第86号に，現任校での取組について掲載の機会をいただいた。「自分づくり教育」と「体力づくり」を柱とした学校経営を紹介し，今後も自信を持って推進していきたいと結んだ。たくましく生きる心と体を育てていくことや，復興を担う子どもたちに必要な力を育てていこうという思いで，今年度も「自分づくり」と「体力づくり」を核とした学校経営を進めている。今回は，本校の自分づくり教育について簡単に紹介する。

震災の翌年より「たくましく生きる児童の育成」を目指して取り組んできた本校の自分づくり教育。卒業時の目指すべき姿を「寺岡小の子どものゴール」とし，日々の授業の中に自分づくりに有効な活動を融合させ，「かかわる力」「みつめる力」「うごく力」を継続的に育てることでゴールの姿に迫っていく。

「かかわる力」を育てることで＜場に応じたあいさつ＞＜友達の良さを認め，支える＞＜地域を知り，大切にする＞ことができる児童に，「みつめる力」で＜自分の良さを自信を持って表現できる＞児童に，「うごく力」で＜失敗をおそれず挑戦し，集団の中で自己を生かせる＞児童に迫ろうというものである。このゴールの姿は本校６年生の目指す姿であると同時に，「仙台市教育振興基本計画」に示されている「自らを認め自らを信じる力」「自ら学び自ら考える力」「チャレンジする行動力」「市民として主体的に社会にかかわり共に生きる力」という４つの育みたい力と軌を一にするものであり，社会から求められている姿でもあると考える。

先日，修学旅行先で前任校の子どもたちと出会った。大震災を１年生で経験した子どもたちである。震災時に身を寄せ合って泣いていた子どもたちが，何もなかったかのように笑顔で挨拶してくれる姿に嬉しさを感じつつも，この子どもたちにしかできないこともあるはずだと思った。一方で，小学校で被災した最後の小学生と共に卒業する自分も，自分にしかできないことがあるはずと思いながらも，まずは「たくましい心と体の子」を育てることが自分らしい学校経営かなと変に納得している今である。

提言
復興に向けた創意ある教育

半世紀以上続く二つの活動

５地区会長　今野　克則（榴岡小学校）

本校の子どもたちが，半世紀以上にわたって取り組んできた二つの活動について紹介します。

ＪＲＣ（青少年赤十字）活動

日本での青少年赤十字活動の始まりは，大正11年（1922年）だそうですが，本校ではその２年後の大正13年（1924年）11月20日に，榴岡少年赤十字団を設置したとの記録があります。それから90年という長きにわたって活動してきました。

「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」という青少年赤十字が目指す実践目標の下，**「気付き，考え，行動する」**を心掛け，活動に取り組んでいます。具体的には，ボランタリーサービス（挨拶運動や地域のごみ拾い等），１円玉募金，ペットボトルキャップの回収，ＪＲＣまつりの開催などです。

先日は，ＪＲＣ委員会の子どもたちが自ら気付き・考えて，ネパール地震救済のための募金活動を展開しました。その様子から，困っている人のために進んで行動しようとする気持ちが育っていることを実感しました。まさに，復興の基盤となる**「相手意識・他者意識」**を高める活動の一つとなっています。

ＢＦＣ（少年消防クラブ）活動

ＢＦＣとは，***B**oys and girls **F**ire **C**lub*を略したもので，平成24年５月現在，全国で約4,749団体，約42万人が活動しています。本校では，昭和39年５月に結成され，それから約50年にわたって活動してきました。

５．６年の子どもたちは，毎年５月に開講式を行い，地区防災訓練への参加，林野火災防止標語板の取り付け，区民まつり「消防コーナー」の手伝い等に取り組んでいます。この活動を通して，子どもたちに防火・防災の知識やけがの応急手当の仕方等を身に付けさせるだけでなく，**自主・責任・奉仕の精神**の醸成も目指しています。

提言
復興に向けた創意ある教育

未来に生きる児童の育成をめざして

７地区会長　金子　倫昌（長町小学校）

東日本大震災は，私たちに，「日本の未来をどのようにつくっていくか」という大きな問いを投げかけた。その問いの答えを見つけていくのはこれからの時代を生きていく子どもである。

現代社会は，高度に情報化が進み，極めて変化の激しい状況になってきている。将来的に子どもは，今までに経験したことのない場面やこれまでの既成の知識や技能・経験だけでは，対応が難しくなる場面に遭遇することが多くなることが想定される。

私たちは，そういった場面で発揮できる力を子どもに身に付けていく必要がある。その力とは，例えば，正解のない課題に対して，これまでの知識や技能・経験を振り返り関連付けながら新しいものを創り上げていく力，想像力を膨らませて新たな視点で解決策を練る力，他者との関わりを通して自分の考えを深め，新たな考えを生み出す力，お互いに良さを認め合いながら合意形成をしていく力などである。

本校では算数を研究教科とし「授業改善」に取り組んでいる。その大きな視点は，「伝達型の授業」から「創造型の授業」への転換である。

創造型の授業とは，子ども同士，子どもと先生とが一緒に新しい知識を創り出したり，新しい方法を見つけ出したりする授業であり，考えることの大切さを学ぶ授業である。この授業をすることで，子どもは，一人では気付かなかった新たな考え方や方法を知ったり，自分の考えを発展させたりして，友達と学ぶことの良さや感動を味わうことができる。そして，この経験が将来へ生きる力の土台となる。

今年度はこの授業を更に展開していくために，外部講師による授業を参観したり，各自の授業に対する指導・助言を受けたりしている。本物の「創造型の授業」に触れることで共通理解が深まり，授業改善が図られてきている。授業中の「なるほど，そうっか，そんな考えもあるんだ。」「それだったら，こんな場合も考えられるよ。」の声に先生方の指導力のすばらしさを感じる。

これからも組織を挙げて授業づくりに取り組みながら教員の力量の向上に努め，東日本大震災が投げかけた問題の答えを見つけ出せる子どもを育てていきたいと思う。

学区紹介　地域とともに

新しい学舎の地域連携

蒲町小学校　仲野　繁俊

蒲町小学校は，昭和56年４月に仙台市の66番目の小学校として開校しました。本校は仙台市の東部に位置し，国道４号線に隣接する商業地域，住宅地域からなっており，東南部には豊かな水田地帯が広がっています。

発災により，校舎が大きな被害を受け，教育活動ができない状況となりました。子どもたちは，蒲町中学校の校舎や体育館等をお借りして７か月間，プレハブ校舎で３年５か月間，頑張って学びました。

この春，子どもたちの待ち望んでいた新しい校舎が完成しました。新たな学舎として新しい生活がスタートしています。「校舎がきれい。」「広くて，明るく，木の温もりがある。」等保護者，地域の方々が，みんな笑顔で，とても喜んでくださいました。復興に向かって，校庭整備を残すのみです。

３月下旬の引っ越し時，各町内会長さん方をはじめ，中・高の先輩方（3.11以降の卒業生），社会学級，ＰＴＡ本部，おやじの会等大勢の地域住民の皆さんが，応援に駆けつけてくださいました。グリーンアーチや花壇の移設と整備，縁石の移動，学校図書館の本の移動と書架への整理，外倉庫三棟の移設等，業者や教職員だけでは対処しきれない部分をお手伝いいただきました。

子どもたちは，困難な状況に負けないで，学び，生活する気持ちを培う経験をしてきました。児童会が中心となって計画•実施した旧校舎とのお別れ式，プレハブ校舎への感謝の会，新しい校舎の完成を祝う式は，節目の大切な学習活動になりました。

特に，新しい校舎の完成を祝う式には，教育長様をはじめ，多数の関係各位の皆様がお祝いにお越しくださいました。子どもたちが，ダンボールで区切った教室の蒸し暑さやプレハブ特有の音の響き等に耐えながら，明るく元気に学んだことを振り返り，多くの方々に支えていただいたことへの感謝の気持ちと，新しい校舎で学ぶ喜びを伝えることができました。今後も，学校と地域の震災の記憶が風化しないように，新たな防災教育や学校地域合同防災訓練等を通して，語り継いでいきたいと考えています。

学区内では，復興に向かって，学校周辺の大規模土地区画整理工事が続いています。学校の東側は，新築の住宅が次々に建ち始めています。登下校時の子どもたちの安全確保は喫緊の課題ですが，地域の学校防犯ボランティア巡視員や交通指導隊の皆様のお力をお借りして，見守っていただいています。幼小中連携した地域合同防災訓練，地域の貞観津波の記録を残す浪分神社やイグネ等文化遺産を活用した学習活動，学校と町内会協働の花プロジェクト等が新たに進んでいます。新しくできた学校東側の道路の歩道の植え込みには，各町内会，保護者，児童生徒等と協力して，ひまわりの種を植える予定です。花いっぱい笑顔いっぱいプロジェクトを推進し，新しい街づくりに少しでも貢献したいと考えています。地域の方々と町並みに花を咲かせ，被災した方々を温かくお迎えしたいと，切に願っています。

新しい学舎での授業づくりと復興に向けた地域との連携は，これから，更に深めていきたいと考えています。校庭の整備工事が順調に進んでいます。地域の皆さんとともに，秋に工事完了した校庭で，学区民大運動会が盛大に開催できることを心待ちにしています。

学区紹介　地域とともに

感謝から始まる心の交流

南光台小学校　中村　昌人

今春着任した折に，冒頭の挨拶でも話したことだが，改めてこれまでのご苦労に対して，前任の飯塚巖校長，丹野富雄校長はじめ旧職員への感謝の意を表したい。

震災後は校舎が使えず，７か月間は学年ごと分散して南光台中，八乙女中，南光台コミュニティーセンター，南光台児童館の４箇所で授業を行った。その後，校庭に応急仮設校舎ができると26年度末までの３年４か月を全校児童とともに過ごしてきた。その間には，校庭での修了式・始業式やコミセンでの卒業式・入学式も経験したと聞いている。子どもたちの楽しみにしている学芸会や運動会についても様々な工夫を重ねて実施するなど，多くの苦労がうかがえる。

着任披露式，始業式では，児童のこれまでの苦労をねぎらうとともに，新しくできた校舎に感謝し，これからも大切にして，後世に残していけるよう話した。また，更に楽しくてすてきな学校になるよう，児童のアイディアを募集し，その思いや願いを受け止めることを約束した。加えて，プレハブの撤去や校庭整備のため，更に不便をかけることについても話し，みんなで頑張り合うことを誓い合った。

６月には校庭の中央に建つ２階建てプレハブ３棟が完全に撤去されて，破砕した基礎部分を取り除いたのち，７月～10月末まで校庭の簡易整備工事が行われる予定である。

４月からは学校支援地域本部が設置され，これまで以上に学校をサポートしていただく体制づくりができた。中核となる方の呼びかけで，地域からも援助をいただき，新校舎の玄関や昇降口へと続く通路や地域の道路沿いに，「復興から未来へ」と書かれたプランターに植えられたチューリップが置かれた。新校舎の完成と新入学の児童を祝福し，地域を明るく元気にしてくれた。

４分の１に縮小された校庭で行われた運動会。全校児童751名が，大勢の保護者や地域の方々の見守る中，温かい声援と拍手に応え，精一杯の演技を行うことができた。７月上旬には，例年秋に行っていた学区民運動会が実施される。これまでの地域の方々の御支援に感謝する上でも整備の完了した校庭で行いたかった。

平成25年７月末からの旧校舎解体作業や26年２月からの新校舎建築。かなりの騒音も新校舎の姿がはっきりと見える頃には，槌音も心地よい音として響いていたのであろう。

今，解体や校庭整備の重機の作業音が連日続いているが，眼前にある工事風景を見ながら，４か月後に校庭で元気よく遊ぶ児童の姿を想像し，今しばらくの辛抱と自身に言い聞かせている。

本校は昭和45年４月に開校。市北東部に位置し丘陵地を造成した団地内にある学校である。旭丘小をはじめ，近隣の小中学校との連携を深めるとともに，これまで同様に町内会や各種地域団体との関係を密にしていきたい。また，伝統を重んじるとともに，より良い校風の樹立のため，児童のみならず教職員も他との関わりを大切にし，感謝の心を忘れずに運営に当たりたい。ハート型に咲いた花壇のチューリップのように。

学区紹介　　地域とともに

開校から２か月
～ありがたさの実感を胸に～

錦ケ丘小学校　今野　和賀子

１　２か月間 待ちに待った校庭完成

961名の子どもたちの「万歳，万歳，万歳！」の声が校庭中に響き渡ったのは，６月１日朝。校庭が使えるようになったことへの感謝と喜びを共有しようと「校庭開き集会」を開いた。

建設会社の方にも来校いただき，感謝の意を表す。朝の運動タイムで親しんだ運動を校庭で伸び伸びと行う子どもたち。そのはじける笑顔が，初夏の陽射しの中にひときわ映える。初めから全てが揃っていなかったからこそ味わうことができたありがたさ。

本校は錦ケ丘地区のほぼ中央部に位置し，近くには蕃山，サイカチ沼，天文台があり，春は桜やヤマボウシが街を彩る。基本設計から３年７か月の歳月をかけて，最終の外構と校庭工事が終了した。吹き抜けやライトコート等自然光をふんだんに取り入れた開放感のある校舎は，木のぬくもりを感じさせ，避難所運営にも十分配慮された構造になっている。

２　お迎え式から開校式，学校教育目標決定へ

開校に向け，教職員が初めて顔をそろえたのは，３月25日午後１時。職員室に移動式テーブルと椅子を運び入れ，諸準備に取り掛かった。

27日，愛子小学校でのお別れ式・離任式後，子どもたちは通い慣れた坂を上って錦ケ丘小お迎え式に臨んだ。地域の方がこの日子どもたちの歩く様子を詠んだ短歌が新聞掲載され，後日学校へもお知らせいただく。

４月１日，第１回職員会議で話したのは３点。

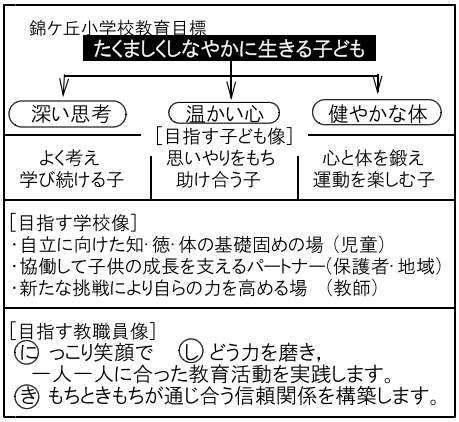
(1)　教員人生の中で新設校に働ける喜びをかみしめ，誇りを持って仕事に当たってほしい。パワーの基盤は，公私にわたる心理的安定。

(2)　時間を有効に使い，優先順位とともに軽重をつけて仕事する習慣を。時間をコントロールできるよう「当たり前」を見直す勇気をもつこと。

(3)　子どもにとって良いと思うことを実践につなぐ。必ずチームで内容と段取りを練って提案。失敗を恐れず，実効あることを続け，助け合うこと。

４月６日の開校式では，地域の豊かな自然をかたどり，四つの願いを込めたすてきな校章が刺繍された校旗を教育長からいただく。

４月第２回の職員会議では，学校教育目標等について，事前に学年ごと検討した内容を集約し，練り上げたものを提案する。その後，更に検討を加え，開校約２週間で学校教育目標等が決定した。



３　共通のベクトルで取り組む

校歌・校木制定プロジェクトが今後本格始動する。校歌は入れたい言葉を児童・保護者・地域から広く募り，思いや願いを集約しながら手づくりで作詞・作曲を進め，年内完成を目指す。「たくましくしなやかに生きる子ども」の育成に向け，子どもを中心に保護者・地域・教師の三者で手を携え，内外の強みを生かしながら共通のベクトルで進んでいきたい。

新任校長所感

震災から学び，復興に取り組む学校経営

八木山南小学校の防災教育

阿部　恭太（八木山南小学校）

八木山南小学校では東日本大震災が発生したことにより，避難所が体育館に６日間設置され約300人の避難者が生活しました。本校からは食事の提供に栄養士が関わったりしましたが，この八木山地区は，震災前から防災に対する意識が高く，町内会等の自治組織が自ら避難所を運営し，困難を乗り切ったそうです。その意識は現在も継続しており，震災前以上に連携協力がなされ，八木山全体の絆は大変深いものがあります。現在東北工業大学の先生が中心となり仙台八木山防災連絡会が組織され，避難訓練や研修会を行っています。今年度からは，日赤医療センターもこの組織に加わることとなり，医療関係者の意見も組織に反映されることになりました。この組織に本校も加わっており，６年生児童が防災に関する出前授業を受け，学校の取組を12月に行われる防災シンポジウムで発表するなど，児童自身の防災に対する意識を高めることに役立てています。八木山南小学校の児童は，地域からたくさんの協力を得て，防災に関する学習を進めています。ここで育った児童が，やがて中心となり八木山地区の防災を担っていく存在になっていきます。

わかる授業づくり，つながる学級づくり

菊地　禎広（人来田小学校）

震災発生時は村田町立村田第一小学校，その後白石市の二つの小学校に勤務しました。大河原管内では児童や校舎に甚大な被害を受けた学校はありませんでしたが，沿岸部からは津波による被害で，福島県からは放射線被害で避難してきた方々を数多く受け入れました。学用品もすべて津波で無くしてしまった子ども。精神的にも経済的にも余裕を無くしてしまった保護者。教頭として様々なケースと向き合う中で，たくさんのことを学ばせていただいた４年間でした。

４月から仙台市の校長職を拝命し，大切な子どもたちの命を預かり守る立場となりました。今年度の学校重点目標に「わかる授業づくり・つながる学級づくり」を掲げました。震災でダメージを負った子どもが授業や行事を通して自信や元気を取り戻していった姿から，学ぶ喜びを実感できる授業づくり，子ども同士がしっかりとつながり合う学級づくりを日常的に大切にしたいという願いを込めました。

学力も体力も自分づくりもすべてはこれが原点。子どもたちの元気と笑顔がいっぱいの学校づくりに努めていきたいと思います。

校歌の精神を受け継ぐ

伊藤　八十二（湯元小学校）

震災から学んだことは，それまでの常識では起こらないと想定していることを超えることが，現実に起こり得るということです。

新任校長として赴任した秋保地区は，幸いなことに甚大な被害が少なかったと聞いています。また，震災に関する心のケアを必要とする児童もいないと

いう状況です。

ある学校評議員が秋保中学校区の教育協議会の席上，震災の風化を心配した発言をされました。私も本校の実態から同様の問題意識をもっています。本校は土砂災害の危険性に対する対策も喫緊の課題です。災害は起こり得るということを肝に銘じて防災対策に取り組みながら，震災復興や防災教育について，職員や児童の意識を高めるとともに，具体的な行動として表れるように取り組みたいと思います。

湯元小の児童は，縦割り活動や秋保地区の他の学校との交流を積み重ねてきました。小規模校であることの利点を生かし，故郷を大切にする心情とともに，自他のために自分たちでできることへ積極的に力を結集する態度を培っていきたいと思います。

「強く正しく明朗に　日々に努めて身と心　練りて鍛えて一斉に　国と郷とに尽くすべし」と土井晩翠作詞の秋保３校共通の校歌にあるように。

地域との絆を大切に

安藤　雄一（中山小学校）

震災当日，私がいた増田西小学校はすぐに避難所になりました。保護者の迎えを待つ児童数名と教職員，そして，避難してきた地域の方々と共に，幾度となく起きる余震の中，不安な一夜を過ごしました。

雪が降り辺りが暗くなり，どのように一夜を過ごすか校長と共に思案に暮れていたときに，近隣の建設会社の方が発電機と投光器を持ってきてくれました。目の前の公民館からは，炊き出しの温かいご飯が届きました。「やる気」と「勇気」をいただいた瞬間でした。その後も，自治組織での避難所運営をはじめ，物心両面で地域の方々に支えていただきました。

私は，大震災を通して「地域の絆の大切さ」を実感しました。そして，この絆こそが，災害の際の助け合いを生み，被害を最小限に食い止め，復興を支える大きな力となることを学びました。学校・保護者・地域が共に支え合う「共助」の精神が，この絆をさらに太く強固なものにし，学校の教育活動を支える太い柱になるものと考えています。そのためにも，三者が共に支え合う関係を育んでいけるよう，地域とともに歩んでまいりたいと思います。

地域と共に取り組む防災教育

阿部　陽介（川平小学校）

あの日，私は教頭として県北の小学校に勤務していた。最大震度７の大地震に襲われた時，今にも校舎が押しつぶされそうな恐怖を感じながら，何とか児童全員を避難させることができた。しかし，臨時休業が続いた。忘れられない子どもの言葉がある。「学校に行きたい。友達や先生に会いたい。勉強がしたい。」学校の存在意義を確信した瞬間だった。

川平小学区では地区防火協会が事務局となり，平成26年８月に「川平小学校避難所運営マニュアル」を策定し，これに基づいて９月に学区防災訓練を実施した。当日は多くの参加者を得て，防災意識を高めることができた。今年度は学校主催のフリー参観・引渡し訓練と地域主催の学区防災訓練を６月20日に同日開催にした。児童と保護者に学区防災訓練を間近で見せることにより地域防災への関心を高めることや，地域の方々に小学校の防災授業を参観していただくことで地域の防災教育が質的に向上していくこと等，多くの相乗効果が期待できる。

今後も学校と地域が一体化している団地の強みを生かし，学校と地域が互恵関係に裏打ちされた連携・融合を一層推進していきたい。

心豊かな子どもたちの成長を願い

眞壁　淳一（広瀬小学校）

東日本大震災の日，私は南光台小学校に勤務しておりました。教育センターに文書を届けるため，校門を閉めて車に乗り込んだときに聞き慣れない音が携帯から発せられ，次の瞬間激しい揺れに襲われました。車のエンジンを切って周囲を見渡すと，風の通り道（３階通路）が白い粉を撒きながら今にも落ちそうになっていました。奉仕作業をしていた６年生数名の児童の姿がありました。自転車を押して歩いていた老婦人の元に駆け寄り，必死に婦人を支え，自転車を押さえていました。自分も恐ろしいだろうに，見ず知らずの人を助けようとする児童の行動に胸を打たれました。二度の揺れがおさまってから，児童へは決して校舎には入らず，校庭で待機するように指示をして私は校舎へ急ぎました。児童はおびえ，校内は見るも無惨な姿になっていました。

その後，使えなくなった校舎を後にしてばらばらの学校生活を送ることになりましたが，自分は何をすべきか考え，協働する日々でした。管理職の的確な采配と教職員のチーム力で困難を乗り越えられたと思います。あのときの児童を見習い，現実を見極め最善を尽くそうとする気持ちが大切と思います。

悲観的に準備し，楽観的に対処する

髙橋　洋充（大沢小学校）

東日本大震災直後，避難所運営マニュアルにどれほど助けられたか分かりません。震災直後，真夜中の職員室で懐中電灯の明かりを頼りに，むさぼるように読みました。また，震災直前に地域で開催された地域防災会議や避難所運営ゲーム（HUG）に，地域や関係各所の方々と共に参加していたことも，避難所運営のみならず，復興への取組において，大いに助けられました。

「悲観的に準備し，楽観的に対処する」とは，どのような状況にも対応できるように準備しておき，いざことが起きたときには全て織り込み済みのように対応していくという，リーダーとしての心構えとして以前から大切にしてきた言葉です。

震災では，準備がいかに大事であるかを再確認しました。復興に取り組む過程ではビジョンを示しながら共に歩む姿勢が必要であることを学びました。

今後は，これまで以上に，危機管理とは何かという問いを常に持ち，備えとしての「地域連携」と「人材育成」を強く意識しながら，学校経営に取り組んでまいりたいと考えています。

経験や思いを語り継ぐこと

村田　隆則（桜丘小学校）

震災の時，私は七郷小学校に勤務していた。38日間すべての教室を開放して，最大2000人の避難者を抱えた避難所運営を経験した。

そこから学んだことは，当時の校長，教頭の判断力と情報収集力である。刻々と変わる学校の状況。避難者のニーズ。職員の動向。外部との連絡。危機に直面して，学校の舵取りをどのようにしていけばよいのかを背中で教えてくださった。また子どもたちには，「傷ついた七郷に自分は何ができるか。」と問い掛けながら地域への働きかけを行った。子どもたちは，それぞれの思いを込めた活動を実践し，復興の一助を成し遂げた。

桜ヶ丘地区は，七郷地区のように大きな被害は受けなかった。しかし，「あの時のことを風化させてはならない。」と，昨年度と一昨年度６年生が被災校を訪問して交流学習を行った。また，防災教育のカリキュラム整備ができたので，今年度はその実践に取り組む予定である。私は，震災での経験はどんな小さなことでも決して忘れてはいけないと思ってい

る。私にできることは，桜丘小学校の職員や子どもたち，そして地域の方々にあの時の経験や思いを語り継ぐことだと考えている。

野村の子どもたちのために

渡辺　美枝（野村小学校）

東日本大震災の時，児童の引き渡しが終わっていないのに近くのマンションからの多くの避難者に驚き，校舎内に案内・名簿作成をし，暗闇の中でアルファ米を準備し，バナナを切り分けていました。ただ夢中で学校に泊まり，過ごした教諭としての日々でした。

卒業式・修了式，授業再開への準備も常に校長の指示の元であり，その指示が頼りでした。

新任校長として学校経営をする立場になった今，あのような災害が起きたら，自分はどれだけの判断ができるだろうかと不安になることがあります。仙台市内の学校でも被災程度の差はあり，残念ながら温度差を感じる中での復興への日々でもあります。

現任校で今重要なことは，最も基本的なことですが，日頃の避難訓練をしっかり積み重ねること，登下校時や家にいるときの安全な避難方法を確認しておくことです。そのために学校は，地域と連携し，地域の防災訓練に参画していくことも大切なことだと実感しています。今年そのための一歩，地域防災訓練を町内会と共に行う計画があがっています。地域との連携第一に，児童の安全のために誠心誠意取り組んでいきたいと思います。

震災から学び，
復興に取り組む学校経営

堤　英俊（小松島小学校）

あの日の夜，途方に暮れて空を見上げると，満天の星でした。普段は，街の光に遮られて見えない星も，たくさん見ることができました。これはきっと宇宙からのささやかな贈り物だなと思うことで，とんでもないことになってしまった，という絶望感を無理矢理打ち消そうとしたことを思い出します。

東日本大震災を経験して，私たちは多くのものを失いましたが，失って初めて分かったこともたくさんありました。その一つが，何気ない日常がいかにありがたく貴重なものだったか，ということです。

あれから4年が過ぎ，復興の槌音は確かなものになりましたが，地域による差は広がるばかりです。

本校では，未来を生き，更なる復興を担う子どもの育成にあたり，「こまつしまスタンダード」を柱にした「学びやすい授業」や「暮らしやすい学級」づくりを推進しています。たくましい心と体を持ち，普段の当たり前の日常に感謝できる優しさと謙虚さを兼ね備えた子どもたちを世に送り出し，復興への力としていく，こうした思いを持って家庭や地域の方々と手を携えながら学校経営に当たっていきたいと考えます。

人，そして，つながりを軸に

丹野　伸裕（鶴谷小学校）

震災当時は，将監小学校教頭でした。校舎の破損が甚だしく，避難所運営は4日間で打ち切り，その後，将監中央小での間借り，仮設校舎への移転，本校舎への復帰と約2年に間に都合4回の引越しを行いました。度重なる引越しや雨漏り等の教育環境の整備は予想以上に厳しく，保護者，地域の方々の献身的な支え，そして子どもたち，先生方の前向きな頑張り，つまり，人の温かさ，様々な方々とのつながりがなければ，なし得なかったと振り返ります。

あれから4年，現在新任校長として鶴谷小学校に着任しました。所は違えど鶴谷小学校も「見守るゾウさん運動推進委員会」「ぱぱさんず」「学区体振」等，地域の学校に対する支援・協力の意識がすばら

しいと実感しているところです。前任校長のもと「学校支援地域本部」「避難所運営委員会」を立ち上げていただいてますので，小中連携も視野に入れながら，人，そして，つながりを軸に，地域のコミュニティーづくりを推進していきたいと思います。

校長としての責務は，人を介し，心が通い合う防災教育及び防災減災体制づくりと考えます。具現化を目指し，一歩ずつ歩んでいきたいと思います。

体験から学び，生かす

佐々　孝（高砂小学校）

震災時どこにいたかということが震災後の向かい方に大きな影響を与えると思います。平成23年３月11日，私は一年目の教頭として東六番丁小学校に勤務していました。最大1800名もの帰宅困難者への対応と学校業務の復旧とでほぼ１か月職員室の床に寝泊まりしました。ときの校長はおもてなしの心を持って真心の避難所運営に尽力されました。避難所を閉じた後，地域に根ざした数々の震災復興教育に果敢に取り組まれました。陣頭指揮を執る校長の姿に私は教頭として間近に接することができました。この体験が校長となった今，震災復興に向けてなすべきことを考える原点となっています。それは，命を守り支え合う力を育てる教育と復興の担い手を育てる教育です。高砂地区においても震災時に避難者を献身的に支えた方々が数多くいらっしゃいました。そうした方々から学ぶことでまちが更に好きになり，まちに住む人たちのことが好きになる取組の充実を図っていきたいと思います。また，長く続く復興の担い手としての自覚と誇りを持つことができるようにしたいと願っています。復興教育の真価は正にこれから問われるのだと思います。

震災から学んだこと

佐藤　正文（岡田小学校）

私は，震災当時，荒町小学校に勤務していました。学校は改築されたばかりで大きな被害はありませんでしたが，校庭が使えない状況での引き渡しやその後の避難所開設･運営，学校再開に向けた取組など，初めて経験することが連続しました。

そうしたなかでも当時の校長や教頭がリーダーシップを発揮し，職員への的確な指示をした結果，地域の方々の協力もあり帰宅困難者を含め1000人以上の避難者であふれた体育館や校舎は混乱することなく，秩序を保った避難所となることができました。ここで，非常時におけるリーダーの在り方，日頃からの地域とのつながり，そして職員間の意思疎通とチームワークの重要性を痛感しました。

震災から４年が経過した今春，津波被災校である岡田小学校へ着任しました。地域の学校として140年余の歴史を誇る岡田小学校。被災校ゆえに配慮することももちろんありますが，これまでの経験を基に必要なときには自分で的確に判断できる校長であることと，職員間の和を尊重しながら地域と一体となって更に歴史を刻んでいく学校づくりに努めて学校運営に当たっていきたいと思います。

つなぐことの大切さ

梅原　隆司（東仙台小学校）

震災当時の勤務校は，体育館等の損傷により避難所として地域の方々を受け入れることができませんでした。大変申し訳なく思い，皆様からの苦言を覚悟しておりました。ところが，これまでのつながりと給水活動での職員の働きぶりにより感謝の言葉を頂戴してしまいました。地域を力付けるには子どもたちの元気な姿が一番という思いで，学校の日常を

取り戻すべく教育活動に励んだことを思い出します。

発災から４年が過ぎ，本学区でも震災は思い出と記録の中だけになってしまいそうな状況ですが，地域の学校とのつながりと子どもたちへの期待は増しているようです。学区内には元気な挨拶の声が響いています。地域には学校を支え協力を惜しまないという雰囲気が満ちています。これらを大事にし，行事等を通して子どもたちの地域とつながる糸をより太くするとともに，関わりの中で自分が生かされ，次につながることを感じさせたいと思っています。

復興には時を要し，再びの大災害もあり得ます。子どもたちが被災地で学んだ者として，復興や減災へのバトンをつなぐ継走者となるよう努めていきたいと思っています。

社会に貢献できる子どもたちを

南條　智重（福室小学校）

震災当時，私は教頭として沖野小学校に勤務していました。震災後は子どもたちを守ることと学校再開のために全職員で避難所の運営と復旧に当たりました。あの時，職員の強い結束力を改めて感じましたし，地域にも震災を乗り越えようとする力強い住民の姿がありました。震災から４年が過ぎ，復興状況は地域によって大きな差が見られます。被災した苦しみや悲しみは一人一人違いますし，見えない心の痛みはなかなか推し量ることはできません。記憶が風化していくことも当然のことだと思っています。これまで私たちは日本中，世界中の方々から多くの支援をいただいてきましたが，これからは自分たちが支援者としてできることを再考する時期に来ていると考えています。東京の知人が「あれだけの震災を乗り越えてきた東北の子どもたちが将来中心となって日本の社会を動かしていくのだと思う。」と話してくれました。これからも長く続く復興のために，「失われた尊い命と生かされた命の重さ」を教え続け，期待される社会人としても広く社会に貢献できるように心身の強さと優しさを育てていくことが私たちの大きな役割であると考えています。

教師が，親が，子どもと向き合う時間の確保と充実を

佐藤　深雪（幸町小学校）

震災から，３週間後の４月１日，六郷小学校の教頭として着任した。当時の校長の熱い思いや奮闘ぶりを思い出すと目頭が熱くなる。一緒に苦労した思い出は尽きないが，常に一番熱い思いを持った後ろ盾があった安心感を今，改めて懐かしく思う。

後ろ盾がなくなった今，教えていただいた熱い思いだけは引き継いでいきたいと思う。

震災の影響で持ちこたえられなくなった家庭が増えているとの話題を耳にするが，本校でも少なからずその傾向が見られる。子どもたちは漠然とした不安に怯え，ストレスを抱えている。母親が抱えるストレスが子どもに影響している事例も見られる。その結果，母子分離ができず不登校気味になる児童や，親や教師にスキンシップを求める児童が増加している。親も子もそのメンタルケアを学校に求める事案も見られ，養護教諭やさわやか相談員等が対応している状況である。

そこで，私は校長として「教師が，親が，子どもと向き合う時間の確保と充実」を図れるような取組を実施していきたいと考えている。

学校・地域合同防災訓練

中林　和雄（東宮城野小学校）

東宮城野小学校学区では，これまでは各町内会単位で，地域の防災訓練を実施してきましたが，６月13日（土）に東日本大震災後初めて地域と学校合同の防災訓練が行われました。東日本大震災での経験を踏まえた指定避難所運営や子どもたちの防災教育のことを考え，地域全体で防災意識を高め災害への備えをしていくことが大切であることから今回の合同防災訓練を実施することになりました。昨年度から，学校・町内会と市の避難所担当が合同防災訓練の実施に向けて話し合いを重ね，計画を立ててきました。

防災訓練当日は，町内会と子供会が協力して，子どもたちも一緒に安全に避難することができました。一時避難所や指定避難所への経路，避難所での町内会ごとの待機場所などを確認することができました。地域とともに歩む学校として，今回の合同防災訓練は意義のあるもので，学区の地域防災のスタートの年になりました。今後，防災訓練の内容を検討していくとともに関係団体・施設や近隣の学校との連携を図り，地域の防災のネットワーク作りとこれから地域の防災を担う子どもたちへの防災教育の充実に取り組んでいく考えです。

子どもたちの学びから

田辺　泰宏（西中田小学校）

昨年度，本校５年生は，総合的な学習において環境学習・防災学習を取り上げ，「共に生きよう名取川」をテーマに，自然環境を大切にすることや東日本大震災をとおして「命の尊さ」や「伝え続けることの大切さ」を学びました。特に，大震災（からの復興）の学習のまとめを，国連防災世界会議仙台大会教育フォーラムにおいて世界に向けて発信できたことは，本校児童にとって，今後の防災意識や人を思いやる心の高まりに結び付いていくものと考えます。

今年度着任した校長として，これまで児童が震災から学んできたことを絶やすことなく，下学年までつないでいくことを教職員と共に進めたいと思います。そのためには，防災学習に取り組んできた６年生を中心に，防災主任・総合的な学習主任等と協力し，全校体制で取り組むことが必要です。ここで，西中田小管理職としては，本校の特徴である「地域連携」を最大限に活用し，地域一体となった防災の取組に移行していけたなら，児童が学んできたことが生かされるのではないかと考えています。

編集後記

会員の皆様の御協力により，会報「廣瀬川」87号を発行することができました。本号では「復興に向けた取組を通し，未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」をテーマに，現在のこの危機の時代を，地域とともに，心身ともにたくましく生きる子どもの育成に取り組んでいる学校の実践を御紹介いただきました。また，３月に仙台市で開催された第３回国連防災世界会議での実践報告，18名の新任校長先生の学校経営への決意を寄せていただきました。

最後になりましたが，御多用の中，玉稿を賜りました校長先生方，御助言いただきました教育局の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。　（87号担当チーフ　高橋一浩　記）

編集担当者：高橋　一浩（高森小）　高橋　純子（旭丘小）　菊地　禎広（人来田小）